

【研究ノート】

現代台湾における建築・デザイン文化の潮流と展望（後編）

藤 森 修*

A Study and Outlook on the Contemporary Architectural Design and Culture (Part II)
after 2000 in Taiwan and its Implications.

Osamu FUJIMORI

Abstract

This study focuses on the contemporary Taiwanese design movement after 2000 in the field of architecture.

I focus on the issues related to what might be termed the current “Taiwanese Identity” in the field of architecture.

I believe that fairly political matters still surround the reality of Taiwanese architecture. However, an important point I wish to emphasize in this study is that contemporary Taiwanese architectural projects, which include both projects designed by prominent foreign architects and those by Taiwanese architects, could be effective for Taiwan's citizens to explore and acquire the feeling of “Taiwanese Identity” in its true sense. I also explore purely architectural design methods, without the political hue, in contemporary Taiwanese architectural projects designed to maintain intimate and active relationships with the minds of its citizens.

In this study, I will demonstrate that Taiwanese architecture is ongoing dynamically, advancing toward establishing the “*Taiwanese Identity*” throughout the world.



図1：圓山大飯店と台北市立美術館

1. はじめに

本稿は前稿¹の後編である。前稿では日本統治時代の建築から2000年以前の建築文化を概観した。時代と共に政治的イデオロギーに翻弄されてきた台湾であったが、こうした時代性が建築に映し出されていることが分かった（図1）。

*東海大学国際文化学部デザイン文化学科

本稿が対象とする時代は、それに続く2000年から現在に至るまでである。2000年には、奇跡的に実現した民進党政権にて、政治が建築を増幅させ、大規模プロジェクトは活況を呈している。「中華民国」が「TAIWAN」へと傾斜していくなかで「台湾のアイデンティティ」となり得る建築は現れているのであろうか。本稿ではその端緒を現代台湾の建築・デザインの潮流に見出したいと考える。

2. 2000年以降の現代台湾建築の潮流



図2：九二一地震教育園區

2018年2月6日に台湾を襲った地震では、花蓮にあるビルが大きく傾いた。水平・垂直が原則の建築にとっては非情な仕打ちであり、阪神大震災の惨事が脳裏によみがえる。

台湾も我が国同様、地震国である。1999年9月21日未明1時47分に、台湾中部でマグニチュード7.3の大地震が発生。死者2415人、行方不明者29人、重軽傷者が11305人に及んだ。この地震では日本統治時代の瀟洒な木造駅舎も損壊してしまった。日本政府は地震発生日に国際緊急援助隊派遣を決定し、どの国よりも早急に台湾の被災地に入った。現地での救助作業に加えて、わが国の阪神淡路大震災の時に活躍した仮設住宅も1000戸送られた。2005年には日本人建築家 坂茂が紙管構造による「Paper Dome（紙教堂）」を中部地震の被災地である埔里桃米社区に贈り、以来日台友好の象徴となる。こうした日本の行動と「呼応」するかのように、2011年3月11日に発生した東日本大震災においては、台湾から日本に170億円に及ぶ義援金が贈られたニュースは記憶に新しい。奇しくも大惨事を通してだが、日本と台湾の友好関係を互いに再認識し合う機会となったのである。

尚、震災遺構の保存に関しては両国とも賛否両論が飛び交うのが常である。1999年9月21日の地震では震源に近い台湾第3の都市 台中の光復中学校において、敷地に走る断層のずれにより地表が2.5mも隆起し、校庭の陸上トラックが断裂した。大半の校舎は全壊したが、大きく傾きかろうじて倒壊を逃れたものもあった。地震発生は深夜だったため犠牲者はいなかった。

その後、学者や政府関係者の調査により、ここを「震災遺構」として後世に教訓を伝承すべきだという方針に至り、一部を修復し2004年「九二一地震教育園區」として蘇生した（図2）。以来幾多の建築賞を受賞している。担当した台湾の建築家 邱文傑（1962-）は遺構の上空にワイヤーを張り巡らせ、布地の屋根で全体を覆うデザイン手法を採った。現地では「針と糸が傷口を縫うデザイン」と形容されている。校舎は骨太な鉄骨により補強されているものの、柱はなぎ倒され、周囲にレンガが散乱し教室の壁には黒板が残されている。ここでは未だに震災直後の残響が感じられる。開館に当たっては無慈悲な延命措置との反対意見もあったというが、こうした震災遺構は、時間の経過とともに惨劇を退色させずに、やがて叡智となり次世代に紡

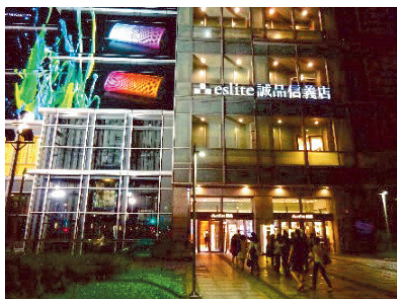


図3：誠品書店信義店



図4：台中の市場



図5：二二八紀念空間



図6：亞洲大學現代美術館

いでいくものと評価したい。

さて、次に2000年に起こった台湾のエポックメイキングは民進党政権の成立である。総統となった陳水扁の影響で更に民主化が押し進められ、台湾が国際化に向けて邁進した。次第に「中華民国」との表記が「TAIWAN」へと傾斜していく。

こうした社会情勢は建築界においての影響も強く、「擬華風建築」からの離脱が次第に顕在化していく。2000年以降に活躍する台湾生まれの「第2世代」の建築家の経歴を見ると、米国や英国への留学経験者が著しく多い。ロンドンのAAスクールで学ぶなど「国際的感覚」が養われた彼らは「大陸」の動向に拘泥せず、追従もしない。既に戒嚴令は解除された。中華文化復興運動^{アナクロニズム}も前時代的となった。民主化へ向かう道程で立ち止まりもしない。「台湾」という小島に留まり、偏狭な「郷土愛ロマンティシズム」を語らない。その姿勢こそ台湾のアイデンティティであるからだ。

世界の建築動向に合流し、より自由に建築創作の手法を模索していく姿が台湾自身のアイデンティティとなった。換言しよう。この姿勢を貫徹し、その結果無意識に産出された独自の建築風味を第三者が事後的に見出すとするならば、これこそ「現代台湾建築」であるといえよう。

さて、1989年にオープンした前稿で既述の「誠品書店」は台湾社会に次々に新店舗を実現させ影響を与える（図3）。「誠品書店」は単なるブックストアではなく、台湾市民にとっての次世代のパブリック・スペースとなる。喧騒溢れる極彩色の都市環境（図4）とは位相が異なるがゆえ輝きを放つ。なかでも台北の「誠品書店信義店（2006年）」は人気が高く、洗練されたインテリアデザインは、1980年に淡江大学を卒業後、日本の東京デザイナー学院に留学、1986年に安藤忠雄氏の薫陶を受けた建築家 陳瑞憲（1957-）が手がけた。陳瑞憲は国内外で1990年代より注目され、香港や中国でも活躍する。現在はアジア圏で最も才能のある建築家の一人と評される人物である。

この時期には、誠品書店の洗練された空間が浸透した土壌に安藤忠雄的ミニマリズム空間が培養されてい

くという現象が台湾建築界に表出した。

建築家 簡學義（1954-）は「宜蘭縣二二八紀念空間（2004年）」（図5）において、歴史の非情を後世に伝える詩情ある地下空間を、巧みな素材の選択にて実現した。安藤忠雄の影響も随所に窺える。「二二八事件」について触れることは長年タブーであり封印されてきたが、ようやく近年になって祈念する空間が実現したことは特筆に値する。

台湾初の安藤建築「亞洲大学現代美術館（2013年）」が台中の亞洲大学構内に実現した（図6）。正三角形のプランを積層した明快な空間構成の建築は、亞洲大学キャンパスの様式建築との対比を際立たせ、安藤流の静謐なオーラを放っている。「三角」という初等幾何学は、大阪万博「中華民国館」を想起させるが、深読みだろうか。ともかく安藤の打ち放しコンクリートは、台湾人の観念を越えて実現した。安藤の抑制された空間は、食品街の袖看板、観光夜市の雑踏、路地裏生活の喧騒、夥しい小型バイクの群れ、極彩色溢れる市場など「ステレオタイプ・台湾」に対峙する「強靱な世界観」を体現したといえよう。次なる安藤建築として、台湾南部嘉義県の阿里山に計画中の「山の教会」の建設が待機している。

さて、こうした動向の「対峙勢力」の代表であり、台湾建築界の王道 李祖原（1938-）の2000年以降の動向を見てみよう。まずは1970年以降の万国博覧会に注目する。周知のとおり万博とは各国が国力を誇示するポリティカルなイベントである。大阪万博以降、国連を脱退し外交的に厳しい立場に追いやられた台湾は以後、「台湾」としても「中華民国」としても万博から疎外され、国内外に自国のアイデンティティをアピールするチャンスを喪失した。

民間レベルでの台湾との交流が活発なわが国でさえ、2005年の「愛・地球博（テーマ：自然の叡智）」では中華人民共和国の真っ赤な外装を纏う「中国館」パビリオンを横目に「イラ・フォルモサ（※美麗島の意）」と命名された小レストランの出店しか叶わなかったのがポリティカルな現実である。だが一方で、2010年に中国が初めて開催地となった上海万博（テーマ：ベターシティー、ベターライフ）では3つのパビリオン「台北館」「震旦館（※オーロラの意）」「台湾館」の出展が実現した。上海万博のテーマは「シティ」であるため「台北館」の出展には政治的矛盾はなく理にかなっており、また「震旦館」は企業館であるため政治摩擦を回避できたものの、「台湾館」の実現には、様々な艱難をクリアしての実現の運びとなった。万博という舞台の国際社会への「台湾のアイデンティティ」の表明が期待された。さて「台湾館」の建築デザインであるが、設計競技を経てまたも建築家 李祖原の案が選ばれた。45年前の大阪



図7：台北101

万博の「中華民国館」では貝聿銘（1917-）との協働により純粋幾何学建築が実現したものの、以後李祖原は、1970年代後半より中華文化復興運動に同調するかたちで中国伝統建築の建築要素を現代建築に翻案する手法を長年追求してきた。

この手法は、508mの高さを誇る台北のランドマークである「台北101（2003年）」に結実する（図7）。中国におけるラッキーナンバーである「8」を意識し、タ

ワーを8つに分節し、且つそれぞれが8層フロアというザッハリッヒ（即物的）な手法が貫徹している建築である。

さて「台湾館」であるが、あいにく与えられた敷地面積が小さく、ささやかな規模の建築しか実現出来ないという現実と李祖原は向き合う。そのうえ最大面積を誇り存在を誇示する中国館に隣接するという設計上・政治上の難題を抱えた。ここで「台湾館」を中華風にデザインしても、隣の猛獣に飲み込まれてしまう。その構図が中国の落としどころか。そこで李祖原は、「一度に多くの来場者を受け入れることができない」という悲劇的与件を逆手に取り、「来場者が外部から鑑賞できるパビリオン」つまり「建築」が「メディア」になるという先進的なコンセプトで挑んだ。

「天灯」の伝統（※祈りを込めて紙のランタンの下部に火をつけ天に放つ祝祭的行事）は大陸では存続していないものの、現在も台湾の民俗行事である。そこで「台湾館」ではこの民族的アイデンティティに着目した。李祖原は映像作家と協働して、「天灯」をモチーフとした通電薄膜フィルムが貼られたガラスのスクリーンに台湾の名所やランドスケープが随時映し出



図8：パフォーミング・アーツ・センター



図9：国立高雄パフォーミング・アーツ・センター



図10：台南市美術館

されるといった斬新な新機軸を打ち出した。単調な井桁状の構成システムを巨大な部材で反復した凡庸で退屈な「中国館」との見事な対比を見せつけたといえる。伝統的中国建築の継承と真摯に向き合い実現してきた李祖原の復讐である。物理的な巨大さ（オーバースケール）は過去の時代ではインパクトがあったが、現代の万博ではその効力が保証されない。大陸の巨大なスケールに対して、台湾は「建築メディア」というコンセプトで挑み、「中国館」を安楽死させた。建築家 李祖原の慧眼と狡猾には脱帽する。尚2013年、「台湾館」は台湾のシリコンバレーと形容される新竹市に移設され、台湾の「天灯文化」を継承している。

政権交代による建築への影響力に拍車がかかり、台湾の建築界は徐々に変貌していく。現在、台湾政府は「美術」「デザイン」「建築」などの創造性ある分野の推進をバックアップし、文化施設の建設を国策としている。

これまで台湾の設計業務は現地建築家が孤島を守る「寡占状態」であったが、2000年の政権交代の影響より、建築プロジェクトの設計者を民主的に国際設計競技によって選定するというステージに移った。その結果、選定された案のほとんどが「外来種」となった。既述の安藤以外に、多くの著名な国際的建築家作品が島内に輸入され、現在、まさに諸都市で建設されている最中にある。



図11：台中国立歌劇院



図12：同上 内部空間

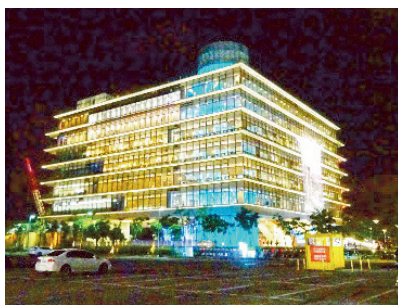


図13：高雄市立図書館 新総館

なかでも代表としては、レム・クールハース率いるOMAが台北市に「パフォーミング・アーツ・センター（2012年－）」を（図8）、オランダの設計集団MECANOOが高雄市に「国立高雄パフォーミングアーツ・センター（2010年－）」を（図9）、坂茂が台南市に「台南市美術館（2016年－）」を建設中である（図10）。既に実現の作品では、團紀彦による南投市の「日月潭風景管理処（2010年）」、伊東豊雄による高雄市の「高雄国家体育場（2009年）」などが挙げられる。とりわけ建築界の大きな話題としては、2005年に設計競技で勝利した伊東豊雄の「台中国立歌劇院（2016年）」である（図11・12）。これは従来の構造システムから脱却した、氏が「カテナイド」と命名する先進的な建築構法が特徴である。3次元曲面が形成するシェルの連続が生む「洞窟」のようなプリミティブな空間は、予算や工期等の難題はあったものの、2016年9月にオープンし国際的な話題となった。現在、現地「台中の旅行ガイド」の表紙にはこの建築が活用される例が多い。

近年には台湾の建築家と日本の建築家が共同で設計チームを作るなどの活躍が見られる。こうした「協働」により、現地建築家は「第三者」の視点を意識することで「台湾のアイデンティティ」を探索していく機会が得られるであろう。

高雄新湾区に2015年1月1日にオープンした「高雄市立図書館 新総館（2015年）」は建築家劉培森（1956－）と伊東豊雄との共同チームが設計を担当した（図13）。作品には色濃い「伊東色」を散見するが、「日本直輸入品」ではなく、台湾の風土的コンテクストに合致した空間特性などが随所に見受けられる。高雄市立図書館では昼夜を問わず市民の賑わいを見せている。

次いで日台協働の事例として、2018年2月に行われた「桃園市立美術館コンペティション」で選ばれた、山本理顕設計工場と石昭永建築師事務所によるプロジェクトに期待したい。

大陸においては戦後、黒川紀章らによる建築作品が実現し始めたが、台湾においては一部の民間プロジェクトを除き、日本統治時代以降長きにわたって日本人建築家の再臨は叶わなかった。近年において、建築表現はより自由になり、それまでの政治的なイデオロギーから解放されていくことが見て取れる。今後も実現が期待される建築家予備軍は、ノーマン・フォスター、ザハ・ハディド、BIG（ビャルケ・インゲルス・グループ）、隈研吾、ステイブ・ホール、SANAAなどビッグネームが続く。彼らは自国の建築文化を台湾に持ち込むのではなく、台湾の文化、風土、ランドスケープに啓示を受けコンセプトを立案する。こうした建築的態度が台



図14：実践大学

日本統治時代に続き、大陸から到来した国民党政権を経て、現在の民主党政権に至る時代の激動に並走し、台湾の建築シーンは変貌してきた。現代台湾の建築界は活況を呈しており、著名な国際的建築家の作品を追跡するように、わが国の雑誌において台湾建築の特集が組まれている。外国人建築家が与える台湾の活況は、かつての植民地支配の構図とは異なり、民主化が成し遂げたものだ。一方でこうした状況は、現地台湾の建築家にとってはプロジェクトの機会を収奪される「皮肉な動向」との見立てもある。だが冷静に状況を俯瞰すると、台湾社会はこれまで決して外来文化を拒まず、積極的に次々とあたらしき風習を飲み込み、自らの糧として



図15：故宮南院



図16：水墨画をイメージさせる外壁



図17：蘭陽博物館

湾の国際コンペで勝利を収める所以である。今後はプロジェクトの実現を通して、現地の建築家に「台湾のアイデンティティとは何か」示唆を与えるだろう。

3. 現代台湾建築家の諸相

以上、2000年以降の現代台湾の建築・デザイン文化の潮流を概観してきた。

王大閎（1917–2018）、高而潘（1928–）の苦節の時代からバトンを受けた、台湾生まれの第2世代の建築家簡學義（1954–）や陳瑞憲（1957–）は安藤忠雄を咀嚼し、自身のアイデンティティを確立し、現在台湾の建築界を牽引している。

こうした文脈のなか、前掲の2名の建築家 陳瑞憲、簡學義と同世代で、近年活躍が目立っている台湾の建築家 姚仁喜（1951–）の動向が今後の台湾建築の展望を示唆している。東海大学（台中）出身の建築家 姚仁喜は建築・アート・デザイン教育で知られる実践大学のキャンパスに「実践大学設計教学大樓（2003年）」を（図14）、故宮博物院の敷地内には、青磁の透明な釉薬の表面に入る繊細なひびに着想を得てファサードに表現したレストラン「故宮晶華（2008年）」を設計するなど頭角を現し、次第に大規模建築に着手する。さて台北に1965年開館の故宮博物院では、国民党政府が長らく大陸の「中華文化」を保存・公開してきた。一方、時の民進党は「大陸の中華文化」から「アジアの文化」へと故宮博物院の在り様を再定義するという政治的企図を打ち立て、姚仁

喜は建築・アート・デザイン教育で知られる実践大学のキャンパスに「実践大学設計教学大樓（2003年）」を（図14）、故宮博物院の敷地内には、青磁の透明な釉薬の表面に入る繊細なひびに着想を得てファサードに表現したレストラン「故宮晶華（2008年）」を設計するなど頭角を現し、次第に大規模建築に着手する。さて台北に1965年開館の故宮博物院では、国民党政府が長らく大陸の「中華文化」を保存・公開してきた。一方、時の民進党は「大陸の中華文化」から「アジアの文化」へと故宮博物院の在り様を再定義するという政治的企図を打ち立て、姚仁



図18：内部のダイナミズム

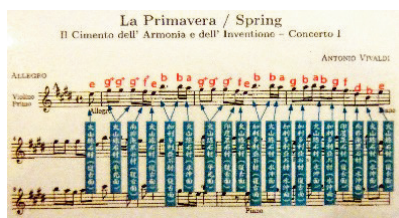


図19：楽曲によるダイアグラム

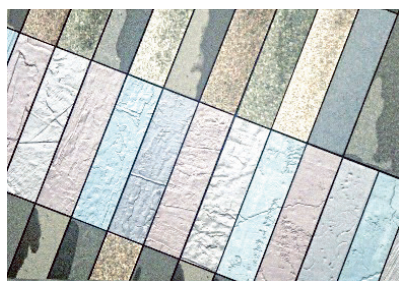


図20：壁面詳細



図21：宜蘭縣社會福利館



図22：同上 中央広場

喜設計の別院を企画した。だが長期化した国民党と民進党の軋轢や、途中の政権交代も経て、構想より11年の歳月を費やし、ようやく近年「嘉義故宮南院（2015年）」をオープンした。70haの広大な敷地には人工湖「至善湖」が作られ、湖に映りこむ故宮南院が遠望できる（図15）。「至善湖」には「草書の筆のストローク」をモチーフとした長さ141mの「至美橋」が架かり、訪問者はここを渡り博物館にアプローチする。建築は水墨画の「濃墨」「飛白」「渲染」という技法にインスピレーションを受け、石材やガラス等の素材で「ほかし」や「かすれ」を建築デザインに体现した（図16）。

「蘭陽博物館（2010年）」は台湾東部の宜蘭県の清朝時代の烏石港跡に計画された生態博物館である。ダイナミックに傾斜した建築は、台湾東北部のケスタ地形（傾斜した丘陵）に着想を得てデザインされた（図17）。20度と70度から成る直角三角形を天地反転させた効果により内部空間では遠近法が強調され、視覚的に訪問者を圧倒させる（図18）。触覚的なアイデアも顕著である。外壁と内壁（一部）を、4種の石材と3種の表面処理の組み合わせより12種のテクスチャーを生み出し、更にイタリアの作曲家・アントニオ・ヴィヴァルディの「四季」の主旋律にのせて「詩的なパッチワーク」として表現された（図19・20）。建築は蘭陽平野の風景を奏でているといえよう。建築家 姚仁喜は伝統と現代を巧みに融合し、建築を包囲するランドスケープデザインは訪問者のシークエンスを演出し空間効果を加速させる。台湾の美しい景観を愛する台湾人の気質を見事に捉えた建築である。

姚仁喜に次いで後続の1960年代生まれの台湾の建築家の活躍も目立ってきた。建築家集団 Field office Architects の代表 建築家 黄聲遠（1963-）は活動拠点の宜蘭に「宜蘭縣社會福利館（2001年）」を実現した（図21・22）。荒削りなディテールとアドホックな空間構成によるシナジー効果が建築のダイナミズムに導いている。ここでは稠密な周囲の都市環境に熟れたヴァナキュラーな建築の可能性を追求している。自作に「台湾らしさ」を投影する氏の動向を注視していきたい。

さて、かつての日本統治時代の市民は80歳を超えた。彼らの孫世代である「第三世代」のクリエイターも台頭してきた。彼らの世代の特徴は、大陸との政治問題に拘泥せず、遠方の虚構を望み見ることもなく、ただ現実の足元にある台湾らしさにアイデンティティを見出し、プラグマティックに思考する。先行世代が煩悶してきた本省人と外省人との対立構造も相互消去され、台湾生まれの「台湾人」として逞しく生きている。

ファッション・工芸においては、MIT (Made in Taiwanの略語) という台湾産素材を使用し、品質の良さをアピールしたTAIWANを前景化する作品展開を進め「タイワニーズ」の人氣に拍車をかける。

デザイン界においては、2011年に日本統治時代の煙草工場をリノベーションした施設「松山文創園區」内に「台湾設計館」が開設され、「台湾」のデザイン基地として情報発信を行うと共に次世代のデザイナー育成に尽力している。アートの世界でも台北市立美術館での台北ビエンナーレや、先鋭のアート展示で知られる台北當代藝術館（MOCA Taipei）において「台湾人」アーティストが独自の作品展開を行っている。近年では大陸でタブー視されるLGBTをテーマとする



図23：参捌旅居

など現代台湾社会のアイデンティティを強調する作品を散見する。

こうした動向と並走するように、リノベーションデザインにおいて若手建築家の活躍も目立ってきた。彼らはかつての日本統治時代の建築が孕む政治問題が桎梏とならずに「物質」として受け入れる視座を生来獲得している。そこでは自由に「リノベーション」し、ポリティクスを換骨奪胎した文化施設として見事に蘇生させる。なかでも、高雄にある1930年代の長屋（店舗兼住宅）を、ゲストルームやサロンを併設した地元高雄の観光情報センターに改装した「参捌旅居（2014年）」が人気である（図23）。2010年に2名の若手建築家らにより設立された寛和建築師事務所（劉宗聖代表）は、剥き出しの躯体に鉄骨造のインフィルを大胆に接ぎ木し、新築では実現できないブルータルな空間を現出させた。第三世代の建築家ユニットは持ち前のドライな視座で、今まさに台湾のアイデンティティの輪郭を描こうとしている。世界の建築家の降臨を大らかに受容し、咀嚼し、やがて徐々に強いストロークで自身のアイデンティティ「台湾」を描いていく。



図24：台湾の形状

4. 現代台湾が孕む^{メタファー}隠喩

「これからの新台湾人は、『台湾は辺境』という過去の認識を改め、むしろ自国を地図の中心に据え、世界を眺めるようにすべきである。（中略）われわれ台湾人が民主と封建の激闘の洗礼をともに受けざるをえなかったのは、こうした地理的要因のためである。しかしそのおかげで、台湾は近代化への歩みを早めることができ、かつ多様な文化を生み出してきた」（李登輝 2015）※傍点は筆者による。

ジャーナリストの高野猛は著書『世界地図の読み方』で世界地図を90度

回転し、ユーラシア大陸の形状を「パチンコ台」に見立て、最下部に位置する湾曲した日本の形状を「受け皿」に見立てるという示唆に富む解釈を行っている（高野猛 1999）。これはあくまで大陸と群島の「輪郭」にインスピレーションされたユーモアある解釈である。上部から降ってくる様々な文化（玉）を湾曲した日本が受け皿となり最下部で受け止めて止揚するという解釈は、些か強引で自虐的な見立てである。殊更「現代建築」「サブカルチャー」においては近年、世界に向けて玉を投げかける役回りの日本であるため、個人的には高野解釈を180度回転させたいところだ。いずれにせよ、こうした解釈では地図を「輪郭」という抽象性に還元することでメタファーを発生させる試行として興味深く、クリエイティビティが横溢している。

改めて時代の潮流を鑑みつつ、台湾のユニークな輪郭を目で追うと、これまで形容されてきた「サツマイモ」というよりは「肺（lung）」の形状に近いのではないだろうか（図24）。肺は空気中から得た酸素を体内に取り込み、老廃物である二酸化炭素を空気中に排出する器官である。ただし肺は一对である。現代台湾をめぐるのは、視認できる肺は一つだが、他方の肺はイマジナリー（imaginary）な不可視な「島影」といえよう。片肺はオランダ、アメリカあるいは日本でもあり得る。換言すればレム・クールハース、スティーブン・ホール、伊東豊雄、安藤忠雄辺りだろう。肺は新しい空気を耐えず吸収していく。かつてから「台湾」は決して押し寄せる世界の文化を拒絶せず、多文化を受け入れながらも「呼吸」し、創意工夫しながらも台湾社会に統合していく。台湾の現代建築家は今まさに深い呼吸のみちなかにある。

5. まとめと展望

前稿では日本統治時代から2000年までの現代台湾の建築・デザイン文化の潮流を概観してきた。歴史を振り返ると、台湾建築は日本統治時代にネオ・バロック建築が興隆し、終戦後は大陸からの国民党政権の影響で表現統制とのフリクションに煩悶した。そこでは中華様式の建築が強いられ、台湾的モダニズム建築の探求を阻まれたものの、やがては「擬華風」の虚飾から離脱していった。流転する時代と共に台湾の建築シーンは変貌を繰り返し、その記憶が建築に映し出されてきたことが分かった。

続けて本稿では、政治的イデオロギーに翻弄された建築家 王大閔（1917–2018）、高而潘（1928–）の苦節の時代からバトンを受けた、台湾生まれの第2世代の建築家 簡學義（1954–）は安藤忠雄をマイルストーンと捉え、咀嚼し、自身のアイデンティティを確立していく道程にあることが分かった。その後の2000年には、奇跡的に実現した民進党政権にて、総統となった陳水扁の影響より更なる民主化が押し進められ、台湾が国際化に向けて邁進した。次第に「中華民国」は「TAIWAN」へと傾斜していく。2019年の現在、台湾は建設ラッシュであり、世界の建築雑誌において台湾建築の特集が現れてきている。専門誌で組まれる特集を見ると、現在、著名な外国人建築家のプロジェクトの百花繚乱に目を奪われがちな台湾である。だが、この島の建築家はこうした華やかなプロジェクトを消化し、こなれた後に、台湾ならではの文化や環境に端緒を開いた建築を実現させている途上にあることが分かった。

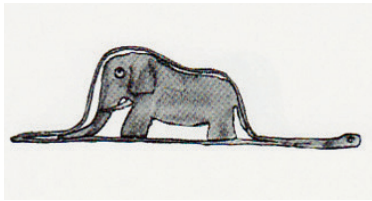


図25：ゾウをこなしているウワバミ

「ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごとペロリとのみこむ。すると、もううごけなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」（サン＝テグジュペリ 2001）

台湾の建築家の登竜門であり気鋭の若手建築家を3年に一度表彰する「ADA Awards for Emerging Architects」において、既述の若手建築家ユニットである寛和建築師事務所（劉宗聖代表）が手がけた「参捌旅居（2014年）」が見事グランプリを受賞した。審査員の一人を務めた安藤忠雄は総評で以下のように語っている。

「若い建築家のみなさんは、これからも情熱と覚悟を持って、メッセージを発信し続けてください。決してあきらめることなく、必死に頑張っていれば、台湾はきっと、よりよい国になると思います」（Hui-Chi Chih 2013）※傍点は筆者による。

歴史を振り返ると、この小島は中華民国という巨大な国家に飲み込まれたのではなく、飲み込んだのである（図25）。今後も美麗島は様々な文化と異種交配し熟れたあとで「台湾」を生み出していくのだ。

6. おわりに

「中華民国 在台湾」「台湾の中華民国」あるいは「中国」「台湾」。政治（ポリティクス）は振子を揺さぶり、アイデンティティの「欲望」と「抑圧」を振幅運動する。その「振幅」は現在までの台湾の記憶・記録として、建築にも強い筆圧で記述される。台湾の建築文化はいつも熱量が高かった。

2017年12月、台湾議会は各地にある蒋介石の像を「独裁者の象徴」として取り壊す法案を可決した。民進党政権が2007年、中正紀念堂を「台湾民主紀念館」へと改名したが、国民党への政権交代を経て2009年に元の名称に戻った。現在の民進党政権は再び見直しを行っており座像の撤去も検討中らしい。

2014年には台南にて、台湾独立派の急進的組織が「中華民国の父」孫文の銅像をなぎ倒した。銅像にはペンキで「打倒国民党、中華民国は出ていけ!」と描かれていた。

2017年10月18日に行われた第19回中国共産党大会において、台湾の与党・民進党の台湾独立志向の風潮を強く牽制し、一国二制度による構想が強調された。

2018年8月には国民党の馬英九前総統の出席の下、台湾初の慰安婦像の除幕式が行われた。慰安婦像は台南にある日本統治時代の日系デパート「林百貨（1932年 設計：梅澤捨次郎）」と道を挟んで対峙している。

「台湾」を巡っては未だに政治的問題が横たわっている。だが、政治の投影を暫し阻み、海原に浮かぶ島影を確認する。たしかに「台湾」は存在する。大海原には来るべき「台湾の象徴」

が陽炎のように現れている。実像を結ぶ日は近い。筆者の課題として、今後も「美麗島」の建築文化の活況に注目していきたい。

註

- 1：藤森修（2017）「現代台湾における建築・デザイン文化の潮流と展望（前編）」『東海大学国際文化学部 紀要』、第10号

図版出典

図1-23：筆者撮影

図25：サン＝テグジュペリ、内藤濯訳（2000）『星の王子さま』 岩波書店

参考文献

〔日本語文献〕

- 後藤治、王恵君、二村悟（2010）『台湾都市物語』 河出書房新社
 サン＝テグジュペリ、内藤濯訳（2000）『星の王子さま』 岩波書店
 台湾マニア委員会（2017）『宜蘭＋台北』 パイ インターナショナル
 高野孟（1999）『世界地図の読み方』 講談社
 NICHE編集部（2015）『NICHE mock02』 工学院大学建築学部同窓会NICHE出版会
 野嶋剛（2016）『台湾とは何か』 筑摩書房
 村松伸、小嶋一浩他「台湾現今設計観察」『SD』（1994年2月号） 鹿島出版会
 李登輝（2015）『新・台湾の主張』 PHP新書
 若松大祐、赤松美和子（2016）『台湾を知るための60章』 明石書店
 「起飛中の臺灣」『at』（1989年8月） デルファイ研究所
 「台湾カルチャー・クルーズ」『Pen+』（2015年10月29日） CCCメディアハウス
 「台湾 TAIWAN」『GA DOCUMENT 139』（2016年10月25日） A.D.A. EDITA Tokyo
 『台湾 観光月刊』（2015.6 564）財団法人台湾観光協会
 『Taiwan Panorama』（2010.6第35巻第6号）台湾畫報雜誌社
 「日本人建築家台湾でブーム」（2016年12月15日） 北海道新聞夕刊

〔外国語文献〕

- 李乾朗（2001）『20世紀台灣建築』 玉山社
 吳光庭、黃若珣（2016）『賽構築』 社團法人台灣現代建築學會
 Aaron Y.L. Lee, 2013. ADA Awards for Emerging Architect Vol.1, Advanced Developers Association
 Annie Ivanova, 2016. TAIWAN BY DESIGN 88 PRODUCTS FOR BETTER LIVING, NOVAMEDIA
 Hui-Chi Chih, 2013. ADA Awards for Emerging Architect Vol.2, Advanced Developers Association
 Roan Ching-Yueh, 2012. WEAK ARCHITECTURE, Garden City
 Tsou Ping-wei, 2012. LANYANG MUSEUM Guidebook, Lanyang Museum